

# 三河 アララギ

平成二十六年

十一月号

第六十一卷 第十一号



ニューヨーク日記(97) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

September 10, 2014 : Yankees game!

## Blue Shoe Diaries

---



野球は普段観ないけどデレックジーターが引退しちゃう前に一度ぐらい観に行かなくっちゃって思ってヤンキース球場に行ってきたよ! 野球鑑賞って言ったらやっぱりホットドッグだよね。ちゃんと食べて来たよ。他にもグルメ系の食べ物売っていたけど球場着いたらやっぱりこれが食べたくなった! ジーターもイチローも見れたよ!

---

I don't watch baseball but being in New York, and especially because a legend, Derek Jeter, is retiring, I had to come watch at least a game at the Yankee's Stadium. So here we are! And of course, you gotta have a hot dog at a ball game! There have been a couple gourmet food stands added in recent years but once I got here, I just had to get a Nathan's hotdog. It was perfect!! And got to see Jeter and Ichiro! Ball game outing, success! And Yankees won the game!

# 目次

## 第六十一卷第十一号(通卷七三二号)

表紙	ジンジャー
ニューヨーク日記(97)	
感銘歌 御津磯夫第十歌集	
歌集「スモン」	
むらさきの径	
放射線	
重陽の名月	
夢でも	
糸瓜の水	
向日葵の花	
祈り	
組織培養	
おクラの花	
名月よ	
拍手を	
またもまた	
有明の月	
土竜	
雨	
長月の自然	
親切	
ブリスベン	
トレニア	
作務衣	
雁来紅	
旅の旅	
セピア色	

今泉	由利	(1)
Blue Shoe		(2)
大須賀寿恵		(4)
岡本八千代		(5)
今泉	由利	(6)
弓谷	久子	(7)
青木	玉枝	(8)
内藤	志げ	(9)
林	伊佐子	(10)
安藤	和代	(11)
遠藤	脩子	(12)
鈴木	孝雄	(13)
足立	晴代	(14)
清澤	範子	(15)
伊藤	忠男	(16)
富岡	和子	(17)
森岡	陽子	(18)
伊与田	広子	(19)
近藤	映子	(20)
半田	うめ子	(21)
杉浦	恵美子	(22)
平松	裕子	(23)
山口	千恵子	(24)
小野	可南子	(25)
夏目	勝弘	(26)
白井	信昭	(27)

清らに澄めり	阿部	淑子	(28)
老いたさくら	秋山	逸穂	(29)
現代学生百人一首	東洋大学		(29)
『ことよせ』	いーはとぶ		(30)
私の一首	胃甲	節子	(30)
	清澤	範子	(32)
	小柳	千美子	(33)
	近藤	映子	(33)
	植村	公女	(34)
	小柳	千美子	(34)
	柳田	皓一	(34)
	小池	清司	(35)
	森岡	陽子	(35)
	丸山	酔宵子	(36)
	大橋	望彦	(38)
	今泉	雅勝	(40)
	今泉	一石	(42)
	鮫島	満	(44)
	山本	紀久雄	(46)
	夏目	勝弘	(48)
	岡本	八千代	(50)
	今泉	由利	(51)
	貫名	海屋資料館	(52)
	平松	温子	(53)
	お知らせ・編集	三河便り・三河アララギ規定	(54)
	編集室	だより(二〇一四年九月)	(55)
	編集	室だより(97)	(55)
	和菓子	街道(97)	(56)
	お知らせ	・編集	(56)

## 感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

折々に古きもの読むばかりにて臥しつつをれば苦は冴えに似る

P 136

この夕べ咲くべき花はましろにて風にも雨にもためらひは無し

P 136

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

ひるがへる蓮の葉すれすれに飛び交ひるを海つばめといふ

あかときの小床に覚めて痛みくる肋とりしあと胸なでおろす

花キリンの鉢のふちめぐる蓑虫はビニールのきれの蓑引きずりて

むらさきの径

蒲郡 岡本八千代

小夜<sup>おと</sup>あらしすぎゆき今朝の庭の径ノボタンの花びらむらさきの径  
ノボタンの紫の径花びらをそつと踏みたりわれの<sup>ひと</sup>一足

馬鹿つたれの孫らと思へどみな吾の孫なり今宵はあはれに思ふ  
昼めしはあつあつうどんにしてすます小さき井わづかな薬味に

初恋の味とか言ひつつ一口のカルピスをのみ書屋にゆくわれ

自生えして花咲くまでは何知らず咲きて驚く<sup>ムクゲ</sup>木槿この花

木槿の花又の名前の夕影草暮れゆく中のそのま白さよ

夕影草一花咲きてしほみ落ちやがてま白にまた花一つ

夕影草の花咲きたればうれしかり<sup>ひと</sup>一日一日のわがことすぎつつ

またひとり静かに遠ざかりゆく如しま白夕かげ草の花咲きつつも

## 放射線

東京 今泉 由利

一様に杉は植えられ奥多摩の山山山のあまり一様

奥多摩の山の湿度のしつとりとクロッキー画はシワシワとする

奥多摩の山のなだりの花の道高砂百合の白々つづく

目に見えぬ粒子を見<sup>み</sup>むとの巧<sup>たく</sup>らみのその大<sup>おお</sup>いなる企<sup>たくら</sup>みのこと

中秋の月の明りに敬意して私の部屋に明りともさず

月面に淡き影する玄武岩その一点の良く良く見ゆる

太陽よ月よ宇宙よ地球にて私の命の今日の健<sup>すこ</sup>やか

よき風の吹きゆくことを喜べり放射能を含みかをらむ

最古なる古生層より湧きいづる湯気を見ている真白き湯気を

石段はワインカラーに染まりゐて染井吉野の桜んぼ頃

## 重陽の名月

豊川 弓谷 久子

君は淋しき生ひたちなりき我が母を親の如くに慕い呉れにき

スーパームーンと子は言ひ我は重陽の名月と言ふ空仰ぎつつ

穂すすきも団子も無けれどそれもよし心静かなり今宵名月

とまどいを隠せぬままに戴きぬ市より届きし米寿の御祝

空しさは心の底に笑顔にて敬老会の座に連なりぬ

いつもより早き開花の御津川の土手彩どりて彼岸花赤し

迎えの車の運転席にハンドル握る免許取りたてみさとの姿

言葉少なく町中を行くまだぎこち無きみさと運転の車に乗りて

鉦たたき庭にすだけり夜もすがら秋の彼岸も今日にて終る

金もくせいの花いっせいに咲き満つる香に包まれて我も満ちをり



## 夢でも

新城 青木玉枝

送り火にゆらりゆらりとゆられつつ君は帰るかルソンの海へ

縁えだしとは言へない程の君との縁半世紀たちでも今だ忘れず

九十年わが心にて走馬燈くるくる廻りて岸へつく迄

人の世の運命さだめは何故と亡夫つまに問ふ手を合せつつ朝夕の祈りに

山里に住みて時の流れを樹々に見る名も知らぬ花土手のすすきと

この荘は土手にかこまれ人一人会はぬ日もあり夕陽は沈む

今更に悔いて切なし残り世をせめて安らに亡き夫に供花を

好きで出て悔いの明け暮れ故里の海が呼んでる岩打つ波も

この足でもう一度だけ渡りたいあの竹島橋の白き橋を

夢でもいい故里の夢もう一度夜空の星を見上げてしばし

## 糸瓜の水

豊川 内藤 志げ

一滴また一滴とボトルに落つる糸瓜の水滴眺めて暫し

計る毎酷みぬくく曲りし小指に挟む肺活量はまずまずよろしと

庖丁を刺したるままの大き芋嫁の手にて小こ々に捌ぶけり

落葉径列なす株に真つ直ぐに立つ薄紫の藪蘭の花

径に沿う藪の木の間の大枇杷の低き一株今日の発見

大枇杷の茶色に熟れし小さき実を挽ぎて食みたり無花果の味

秋彼岸母の命日は六十年むととせに遙かに思ふ間近に思ふ

高速道路の傾り一面葛の原葉陰に短かき濃紫の花

デルデルのホースの水は霧のごと葱に打ち水時間をかけて

弓張りの峰は一面雲の帯流るる雲は東に向う

## 向日葵の花

岡崎 林伊佐子

花首を風に揺らして向日葵は昨日の雨の雫をこぼす

一人なればひとりの心を遊ばせて直播栽培の野菜の作柄

豌豆の初花咲きてその蔭に身を寄せて休む残暑の真昼

流るる汗ながるるままに大根の畝に土寄すひと鋤ひと鋤

間引きして畝間に捨てたる赤かぶが一握りつつ雨に根付きぬ

今際なる母に添ひ寝の幼な日の心離れぬ彼岸の墓に

年間えば指で答へるひ孫いて三才となる前途を祝ふ

耳廃ひて五十年の世を過ぎたれば吾にかかはる夫を哀れむ

歌に縋り耳廃ひて世を超えきたりただ先生のみ歌に学び

杉の間に見え隠れする電線が住まざる里の家いえつなく

喧騒も訪ふ人もなきふる里の旧家を守る老いし二人は

## 祈り

豊川 安藤和代

朝顔の咲きてもわかぬ歌心夫病みて早や五ヶ月を過ぐ

病窓に新幹線の遠く見ゆ夫と旅行の夢を語りぬ

手術終るを待つ時間の長きこと疲れた体にネオンがまぶし

九時間の手術にも耐え夫は今吾が顔を見てわずかなほほえみ

単調に落つる点滴三種類退院の日を祈り見つむる

病みをれば頼りし夫を励ましつそのひと時を尊く思う

入院前夫の植ゑたる苦瓜があまた実りて陽に輝けり

孫の背に水着のあともくつきりと夏をとどめて新学期来る

真昼間の猛暑忘るる夕風に心安らぐ虫の声聞く

宿舎へと下宿へと孫送る朝低くひくくと秋蝶の舞う

## 組織培養

蒲郡 遠藤 脩子

葉を落し茎のみとなり花咲きぬわが赤紫のデンドロビウム

デンドロの組織培養幼苗は十年を経て花咲けり

デンドロの気根伸びれば苔で包み大鉢中鉢小鉢で十鉢

傾く日の光の帯浴びわが前をたまゆら光りて小鳥消え去る

折々の思ひを書き留め入れ置くは三河アラギ郵送袋

取り出す紙片の文字に心寄せ息吹きかけてリズムに乗せて

片方ずつ眼を閉ぢて確かむる網膜変性視野を欠くとふ

透明な宝剣みたいなわが飛蚊上下左右に眼グルグル

高空に輝く月をただ仰ぐその文字のある己が名嬉し

そういえば二頭の黄蝶が上へ下へ乱舞するのを眼のあたり見き

## オクラの花

沼津 鈴木孝雄

北の空大きな灯りが点々と花火に見まがう富士登山道

クツワムシコオロギなどに負けないとガチャガチャ鳴いてガチャガチャガチャ

秋立ちて虫の音聞きつつ涼しげに狩野川堤はジヨツガー天国

曼珠沙華彼岸を前に咲き始め異常気象は花にも及ぶ

灌水では色薄かったナスの花一雨もらい濃い紫に

今朝のサラダ野菜はすべて自家製だ大根ピーマンルッコラトマト

人参葉食むアゲハチョウの幼虫を手で捕まえて草むらに放す

オクラ花朝に癒やしをくれたうえしおれた夕は美味をもたらず

前線抜けやっとかぶりの青空に我が畑にもアカトンボ舞う

裏道にオオバマツチの看板が覗いてみると立派に操業

## 名月を

東京 足立 晴代

中秋の松が枝ごしの月満ちて明るき中に兎影あり

満月に供えし団子美味なりやす、きもゆれる夜長かな

冷ややかに秋しのびよる夕暮の燈火あわくまたたきて

過ぎ去りし雨風荒れて一面の黄金の穂波打ちしおれたり

名月を待ちし夜空は晴れ間なくはてなく続くうす炭の色

広々と緑の芝生ひろがりて起伏の丘に人影ありて

高原の清々しき気一つ杯に山路ふみしめ歩む吾なり

菊香る被綿ふくむ清らなる露一雫肌にふれしを

雷鳴のひときは轟くかなたには光走りておそろしきかな

敬老と米寿の祝いいたゞきてあらためみたり我が歳を

## 拍手を

春日井 清澤 範子

八王子神社に拝し拍手を打つ音響く一時の静寂

夫の耳遠くなりたり吾はまた近くに寄りて声を大きく

杖をつき夫と歩く堤防の薄の中に曼珠沙華咲く

この夏をもう果つるのか白き地のわが足音に羽撃くはばた蝉よ

予算思ひ今夕の献立考へる木犀匂ふ道歩みつつ

善応寺の庭で写真を撮られた日三河アララギ三十周年記念歌会

山里の小川の瀬音聞えつつ鮠はや追いし日の幼かりけり

ガードレールを越へて伸びたる夏草を刈られレールの白さ増したり

待ち待ちに雨はサワサワと音のして椿の葉々を濡らし行くなり

眠られず床の中に静もりて今宵涼しき虫の声聞く



## またもまた

大阪 伊藤忠男

まさかなる神の山にも噴煙が誰が怒らし誰が損ねる

またなのか品換え襲う天災に予期せぬことと言うが悲しや

今年また忘れ得ぬ傷刻まれる歴史に残るトラウマの年

足下の見えぬ怖さに取り乱すこの世の明日と言えなくもなし

またも散る幼き命無惨にも何がありしか何が起るか

命ほど重きもの無しはずなのに何とも軽き今のこの世は

足早に巡る季節ももう秋か静かに実り待つはずなのに

またも又老舗の名前消え去りぬ栄枯盛衰なれど寂しや

辛きこと悲し寂しさこの世にて楽し喜び待つのもこの世

残暑すら耐える間なきや秋の色揺れるススキにコスモスの花

## 有明の月

東京 富岡 和子

夏並木ライラックよと友の言い百日紅さるすべりと正せど聞かず

ダンゴ虫ちりとり置き睨めっこびくともせずのいつものオマメ

大毛蓼こぎょう幼き日での蘆の上飯事まますごごはんゆたかに実り

幾たびに犯人さがし悲しけれ鶏冠花けいとうの茎折りたるは鳥

待ちわびた虫の音たしか夕餉どき団扇を持ちてリリリリさがし

赤い月道の真中に環七号大きく昇り喚声あがる

まだ丸い有明の月中空に白くふんわり朝のごほうび

黄一ト葉実りの前のからす瓜暑さおさめの小雨に涼し

祭あと思いのほかの錯覚に廻り道よしこぼれ萩ふむ

夏枯れの小庭に点る彼岸花小菊葉友ともに直立姿勢

## 土 竜

東京 森 岡 陽 子

長雨が土竜の巢穴に流れ込みたまり水走るビーバーの如  
盆の時友から届く桃の箱箱あく前に香りふはつと

蟬時雨うるさき声も何時からか夕べ気づくと秋の虫の音

樹木伸び苔むす庭に変はるとも屋敷変はらず偲ぶ年月

ついついと四方山話に手がとまり口だけ忙がしお茶を飲み飲み

花梨の実小さな小さな柿の実も塀から覗く古い家並

伊豆の浜子供等遊び賑ふも一羽の海鷗岩にぽつんと

秋風がそつとやさしく頬を撫で大室山のリフト爽やか

あれやこれ玩具の箱のお気に入り犬達遊べと出しては運び

いく筋も湧き出る水の湿地には名も解らずの白い花咲く

## 雨

豊橋 伊与田広子

広島は洪水なるに我が地方雨も降らずに乾燥したり

豊橋に広島の如き雨降れば我が家の辺りどうなるかしら

われ一度公聴会にて発言を都市化進めば雨水を下水へ

わが地方集中豪雨来たならば被害どの程かと安じをり

熱中症われは恐れて外出を控へて家に閉じ籠りをり

テレビにて竜巻落雷注意せよ雨戸を閉めて家に籠りぬ

厚き雲太陽見えず雨降らず人影もなし気味悪ろきなり

われ一人一人生活らしになれたりてテレビ見ながら夕食をする

八月も末ともなれば朝夕は涼しくなりぬ歩き回らむ

夏過ぎて涼しくなれば歩くこと体に良きに足も鍛へむ

## 長月の自然

名古屋 近藤映子

わが夫の新盆参りの法事後に息子親子と一夜を共に

夏の夜を息子親子と共に来ぬ伊良湖岬の夕日美し

連日の熱中症注意情報テレビのニュース吾は冷茶を少しづつ取る

東海の伊勢湾台風風化きみ世代の変る意識のこわさ

暑い暑いを乗り越えて長月の何故か分らぬ一抹の寂しさ

「天徳院功道淳土」の文字残るお線香西明寺様より盆に受く

九月八日中秋の名月くつきり夜空を照らすよ八階の宵

長月の大相撲の始まりてTVを楽しむ夫を思い出し

彼岸入娘と共に墓参り息子家族と合流の一時よ

息子家族娘と共に夫の墓参り無事に終たる我誕生日

## 親切

新城 半田うめ子

物干の近くに來たりて青蛙とびはねつつ何を楽しむか

病みし人見舞ひしの家他人の住む淋しかりけりひふみ様居らぬ

野の鳥も食べ物少なく田の中に死亡して居りあわれなりけり

幾年前か仕舞ひ置きたる梅干しを今日は食むなり味変りなし

冬の過ぎ夏を迎へて着る物は変化無きままうす着とするなり

もらいたるさつま芋今日も食みて居り味のよくして赤いもなりぬ

楽しみきゲートボールの部員にて老ひほけたりて現在やめたり

名鉄くろのグランドホテルにて楽しみき若き日の娘の親切なりし

西川の小さき魚のそよぎつつそれをつり居り老人なりぬ

## プリズベン

蒲郡 杉浦恵美子

この家族四番目の子に会ひたさに遙々訪ぬプリズベンは春まつ盛り

三男児上から順にハグをしてさて四番目は昼寝の最中

春の宵プリズベンのキッチンにご飯炊かるる湯氣立ち昇る

汁椀にちぐはぐ箸の夕食の鮭照り焼井何よりご馳走

血縁は露ほどもなきこの家族されど我が世の行く末照らす

この次の我が訪問時この子等は何れも我が背を抜いて居るだろ

一週分溜まった新聞積んだまま過去のニュースは逃げないもんね

誘ふ人居て呉れるから田原花火憂さを忘れて引き込まれ居り

予期せずに秋の半日空きました栗渋皮煮作るとするか

然は言へど栗渋皮煮作る間は雑念もなく哀しみもなく

## トレニア

豊川 平松 裕子

米を三合真昼の厨に研ぎてをり夕餉に幼とその母の来る

今しがたの雷は去り雲ひとつなき秋の夜の月色さやか

餌だけをねだりて未だなつかざる早や二月を飼ひふたひるる猫の

晴れといふ予報の今朝の雲りゐて光なき窓辺にコーヒー運ぶ

走りつつ聞きゐるラジオ深夜便「今日の誕生日の花」のコーナー

深夜便の「誕生日の花」のコーナーの終はれば五時なり「ラジオあさいち」

トレニアの花ことは愛嬌とラジオ深夜便諾ひて聞く

雑草の如くさ庭のあちらこちら咲きゐるトレニアは愛嬌の花

我が庭に咲きゐるトレニアを思ひつつ憎めぬ花よと自ずと笑みゐる

この青は広重の版画の空の青東より中空に今朝の空の青



## 作務衣

豊川 山口千恵子

表紙画の蓮の花美しき九月号届きし三河アララギ両手に持てり

顔にかかる意外に強き蜘蛛の糸払ひはらいて屑捨てに行く

故もなき一つのことにごだはりつつムラサキシキブの円実による

小刻みに羽ふるはせて黒揚羽白花彼岸花の花から花へ

赤く咲く彼岸花の一群を残して空地の草刈りゆけり

畦毎に列なす赤き彼岸花稲田もそろそろ色付き始む

穂の出でし稲田の畦に彼岸花秋の彩り列なす花は

出穂稲田の畦に屯する数羽の白鷺白さ際立つ

西日除けに植ゑたるゴーヤの蔓に生るゴーヤ小さく秋になりゆく

もう着ないウールの着物解きてをり本を頼りに作務衣に仕立てむ

## 雁来紅

豊川 小野可南子

しみじみと新あらたしき思ひにわたくしの短歌うたを読みゆく文字たどりゆく

久に久に青空見上ぐ風さやぐ業平竹もさ揺らぐこの朝

おしぼりの程よく熱きを目に充てる我が疲れ目を癒やすひととき

播もときてより只一本の芽生えなり目守りつづけてこの雁来紅

雁来紅はハゲイトウなりと教えくれしあなたも今は病みてゐませる

初物の掘りたて小芋のまろまろは八名丸といふ初めての種

始めての夏休み終へし一年生この児等の目に強さを見たり

自然薯の二本に迷わず孫佑真己が背丈を超ゑたるものを

残り香といふにやあらむこの朝の窓にかぐはし夜香木なり

「さようなら」「そうであるならば」「遠く聞きつつ我が睡りゆく

## 旅の旅

豊川 夏目勝弘

晴れ間いで旅の旅をと思ひたつ子規の跡をと箱根に向ふ

子規ゆきしは鉄道馬車なり異なるは登山鉄道の往復キップ

箱根路の途中で写せしみ姿は菅笠かたへにワラジ結ぶところ

立ち塞ぐ大木仰ぎ右下は深き緑の千尋の谷

車窓寄り木の間に見ゆる箱根路に子規の姿をかさねてみたり

子規ゆきしは黄葉紅葉の彩りのなか車内を暗めるカエデの緑

外国人若きカップル中年女性少し怪しげな一組も居り

電車ゆえスイッチバックで登りゆく鉄道馬車はいかに行きしや

トンネルに入れば窓は鏡なす女が髪を手櫛に直す

汗もせず雨具はリユック腰を掛け手ぬき手ぬきの旅の旅なり

## セピア色

豊川 白井信昭

台風のしき降る雨を含みつつわが木香薔薇は撓み撓める

玉垣に沿ひ行く道の道の辺に馬の繋がるまぼろし幻見ゆる

この部屋はかつて診察室数々のモノクロ写真はやセピア色して

建ちてより「今泉医院」八十五年わが思ひ出の絵はがき二枚

## 清らに澄めり

横浜 阿部淑子

アフリカのエボラ感染増大し救護団の無事を祈りぬ

秋空の大キャンパスに夢ひろげ飛ぶ鳥えが描く白雲の筆

秋深く緑濃き木々緑なすひとときわ赤く彼岸花咲く

雲雲の合間に見ゆる名月に地球安かれ手をば合わしぬ

秋の夜よわ半草むらに集すだく虫の声清らに澄めり心洗わる

## 老いたさくら

『招待』 秋山逸穂

赤黒きさくらの蕾は細枝に円ら涙の形につらなる

四十年通いつづけし公園のさくら老いたり我も老いたり

町会の人人あつまり公園に伐採されゆくさくらに對う

チエンソーにて枝を切らるる老い桜涙のごとき木屑をこぼす

鳶職は枝かろやかに渡りつつ太き枝へとワイヤーかけゆく

## 現代学生百人一首

東洋大学

父の日は恋しくなつて空を見た探していたよ父似の雲を

東京学館船橋高等学校 一年

廣澤修也

頑張つてと言つた友はあつさりとおつという間に恋敵なり

稲城市立稲城第三中学校 三年

堀紗矢香

信州の祖父の畑で汗流し少し大人になつた気がする

町田市鶴川第二中学校 二年

笠原宏道

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

昨日今日携帯常に持ちてをり孫の生まるる知らせを待ちて  
盆過ぎてわれら三姉妹実家に集ふそこに一報孫誕生の

森 厚子

八月の風がカーテンゆらしをりあをあを稲田わたり来し風  
墨色の海遠くにあるこのしじま漁に行くらし船音聞こゆ

山崎 俊子

子や孫らと分け合ひてをりこのおはぎあなたへの読経すぎしひととき  
台風の過ぎゆきてやうやく家に帰りわれの独りの雨戸あけたり

三田美奈子

夏休みの孫の課題に付き添へば遠くよりただ蝉時雨の声  
中庭より御詠歌の声きこえつつ寺庭に吹く涼しげなる風

水野 絹子

待望の孫のバレーの応援に来たりてわれの若き頃思ふ  
魚つりに海水浴にと予定立てし夫ははや今日孫らと海へ

牧原 規恵

三河線存続の危機あるらしきに今日も定刻に赤き電車ゆく  
黄昏の雲は消えつつこの時に帰郷せし子ら皆帰りゆくよ

稲吉友江

再びの梓川沿ひ夫と歩むかつて来たりしかの日のように  
「お盆の時ありがとうね」孫の手紙けふまた出して読み返しをり

鈴木美耶子

亡き母の静かなる人柄浮びくる暫し六人の家族の団欒

今朝の朝庭に咲きたるくれなるの朝顔の花の露ひかるかな

吉見幸子

しみじみと夏に思ふは戦争を語らず逝きにし父母祖父母よ  
暑き今日もネット相談の研修に普通電車を待ちて乗りゆく

牧原正枝

雨の降るこの夜もラジオの深夜便をひとりききをり子守歌のごと  
保育園の弾める声が聞えくる遠く遠くにわがすぎ去りし日よ

岩瀬信子

歌会の友らの批評ききてをりしみじみと今日もこのひとときよ  
孫曾孫そろってとばすシャボン玉淡き水玉空に消えつつ

石田文子

## 私の一首

法師蟬しき鳴く朝よ爽やかな秋の空気と変りてゐたり

胃 甲 節 子

十月になつても、三十度前後の暑さで、少しは秋めいて過し易くなるのかと、期待していたのですが、それは私の甘い考えでした。彼方此方の、天気予報では三十度を越えて、とても秋とは思えない日が続き、暑い暑いと思つていた時、朝窓を開けた時、法師蟬の声が元氣よく聞こえ、吹く風は、爽やかな、秋の風と変つていて、ああ秋の風だと嬉しく思いました。待ちわびた、秋の風を、詠みました。此のまま爽やかな秋となりますように。

心癒やす桜満開の公園の憩ふベンチに温もりのあり

清 澤 範 子

今年の春は桜の開花から、いつまでも寒気が残り、桜の季節を長く楽しむことが出来ました、いつも詣でる八王子神社の前に公園があり、自転車を止めてベンチで休みます。丁度満開の桜の下で夫と腰をおろし、二言三言話し合ふのどかな春のひと時を過すベンチは、かすかに温もりてをりました。

また来年も二人元気で桜をめることが出来ますやうに……………。



裏返り金蚊躑く庭先を揚羽過ぎゆき蝉鳴きたつる

小柳千美子

午前中の家事を終えてホットひと息。ふと庭先を見ると、どうしたものか、かなぶんが仰向けの状態で蹴いている。その上を、揚羽蝶が風に乗ってふわふわ。そのうち傍らの木で、蝉が鳴き立てる。アロエの葉先を折って差し出すまで半時。漸く起き上り、飛び去って行った。

暑さも峠を越している。季節の変りめに、ひたすら生きる命を思った。

わが夫の「お母さん」「映子さん」の声今はもう無く寂し

近藤 映子

平成24年10月号より

夫が出先にて脳出血にて倒れ、日赤病院に救急入院して以来早や九年目も半ば過ぎる。その間、もう十三回の転院をしている。それでも何とか孫を見せたいと娘と共に通院を続けているのであるが、時々、ああもう私の名前を呼んでくれることは出来ないのだと、つくづく夫の額をなでると夫はフーと気持良さそうに私を見る。テレビが付いていても、私の顔をジット見ている。私は夫の左手を両手で擦っていても、たまらなく寂しい気持が高まる。

『俳句』

十五夜や二円切手の兎舐め

植村公女

検眼のあてずっぽうや水澄める

新秋や盲導犬の哀しき瞳

竜胆に誘はれ人に逸れをり

小柳千美子

芒原小野小町の市女笠

竿竹に宿る靈氣や月今宵

晴天や秋蟬の朝始りぬ

柳田皓一

かたまりて茎の青さや曼珠沙華

秋彼岸卒塔婆新たに南無阿弥陀

庭先に無人売店芋の秋

小池清司

来し方と痩せ臍に問ふ敬老日

草の実にまみれて猫の朝帰り

秋鯖の背に黒潮の匂ひけり

終バスの去って沸き立つ虫時雨

空と海境もこもこ秋の雲

森岡陽子

新涼に多摩川土手の車椅子

雨上り山の向うは秋の空

秋の海波なき岩に鳥一羽

浜辺から小萩咲く道奥の寺

かさね吟行会

(等々力溪谷・九品仏) 九月

田中清秀

目立たざる梢の先の初紅葉

田中清秀

溪谷の谷沢川は上用賀付近が水源で谷底を穿ちながらさらに等々力不動の滝と合流し六郷用水の下を潜りぬけ多摩川に落ちている。また、溪谷には三十箇所以上の湧水が発生し水の溜まる所にはセキシヨウ草地や湿性植物群が点在している。

等々力溪谷は東急大井町線等々力駅から南に三分ほど歩き階段を下ると直ぐに溪谷の散策路となる。谷間の空気が澄み木立の間から薄日が差し都会の喧騒をしばし忘れさせる。今回の吟行は平成二十六年九月二十三日その等々力溪谷と九品仏浄真寺への参拝として行なわれた。

参加者は松本周二、山元正規、柳田皓一、森岡陽子、今泉由利並びに今回初参加の山迫京子と筆者の七名であつた。今日は秋のお彼岸の中日暑さ寒さも彼岸までとは言いて妙心地よい散策日和である。溪谷を流れる谷沢川には遊歩道が整備され両側にはシラカシ、ケヤキ、ムクノキが生い茂るが残念ながら紅葉は僅かしか見られない。また、足元にはシャガや水引草など色々な草花が群生している。

堰に来て流れ早まる秋の川

山元正規

水澄むや浮葉の影の底に這ふ

田中清秀

溪谷をそり吹きゆく秋の風

今泉由利

じわじわと崖の湧水秋の草

森岡陽子

爽やかや小さく滲む不動滝

柳田皓一

鈴の音の涼しき不動秋彼岸

松本周二

下流に進むと古墳時代末期から奈良時代と思われる横穴古墳群見られる。また、溪谷の南側には桜の名所として知られる等々力不動尊、その下りたところには不動の滝があり古来より滝に打たれて行をする人々が各地から訪れる。

秋分の今日の日差しの暑からず

今泉由利

溪谷の道を狭めて水引草

山迫京子

虫食ひの桜紅葉や空青し

松本周二

水音に色つきそめし初紅葉

山元正規

誰某と知れぬ古墳の曼珠沙華

田中清秀

かたまれて茎の青さや曼珠沙華

柳田皓一

不動滝銀杏臭ふ横の道

森岡陽子

身にしむやお香二本を稚児大師

松本周二

ひと筋の秋滝うがつ石の窪

山元正規

昼食は等々力駅近くの中華料理店で済ませ大井町線で二駅戻り九品仏に向う。

九品仏は一義的には浄土宗浄真寺に安置されている九体の阿弥陀如来のことであるが同寺の通称ともなっている。広さ三万六千坪ももとは世田谷吉良氏の奥沢城であったが廃城となり一六七八年阿碩（かせき）上人が同地に浄真寺を開山した。九品は浄土宗における極楽往生の九つの階層を表すという。

秀麗の彼岸に座す九品仏

山元正規

荘厳な氣に下ぐ頭秋彼岸

森岡陽子

南無阿弥陀卒塔婆を手に法師蟬

柳田皓一

老木に銀杏の実すずなりに

山迫京子

境内には古城の土塁が残っておりカヤヤトチの大木、イチョウの古木などが茂る。広々とした敷地内には本堂の対面に三つの阿弥陀堂があり其々に印相の異なった阿弥陀如来が安置されている。本年八月には「お面かぶり」と呼ばれる仏教行事があり菩薩の面を被った僧侶が本堂

と上品堂に渡された橋を菩薩の来迎を表すごとく歩いたという。そして今日は期しくも彼岸の大法要にあたり広い境内に南無阿弥陀仏と唱える念仏の声が響き渡る。

スピーカーより念仏を聞く秋彼岸  
切り株にぶらり逆さの赤とんぼ  
山迫京子  
森岡陽子

秋の日を浴びながらのんびりとした散策であっても囁目五句の作区を忘れず句会の奥沢区民会館に参集する。例会のごとく披講、選句を無事に終え夕刻に散会となった。

■ かせね吟行会 ■

日時 2014年11月25日（第4火曜日）

場所 芦花公園

集合 京王線・芦花公園駅改札 11時

句会場 恒春園

昼食 レストランにて昼食会

申込 森岡陽子宛 (03) 371122835

## 『酔いの徒然』（三十一）

丸山 醉宵子

### 『インド映画考』

『マダム・イン・ニューヨーク』『めぐり逢せのお弁当箱』『バルフィー！人生に唄えば』と最近立て続けにインド映画を見ている。

インドは、年間映画制作本数も映画館観客総数も世界一多い映画大国で、娯楽としての質や出演女優の人気などのため、インド国外でもインド系住民を中心に人気がある。特に東南アジア、南アジア、西アジア、アフリカ諸国で高い人気を博している。北インドを中心にインド全土で上映されているヒンディー語の映画は、その制作の中心地であるムンバイ（旧ボンベイ）をもじってハリウッドに対抗して、「ボリウッド・フィルム」と呼ばれている。

多くは3時間前後の大作が多く、勧善懲悪のシンプル

なストーリーの娯楽作で、ストーリーの途中で場面ががらりと変わり、原色の豪華な衣装、多数のバックダンサーによるミュージカルシーンが挿入され、歌や踊りを十二分に堪能する事ができる。

インドの娯楽映画はアクション・メロドラマ・コメディ・歌・ダンスなど娯楽作品としての要素を雑多に含んでおり、これらは「マサラムービー」と呼ばれていて近年人気が上がっていたが、最近ではインド経済成長とともに、内容もかなり洗練され「スラムドッグ\$ミリオネア」でアカデミー賞を受賞するまでになっている。

特に、主演女優が大変美しく気品にあふれているのだ。「マダム・イン・ニューヨーク」のシユリデビ・カプールは、4歳で子役としてデビューしインドのアイドル的存在として人気を博したが、結婚を機に女優業を休業、15年ぶりの女優復帰作となったのである。50歳とは思えない美貌と知性と品格を保ち「インド映画史100年国民投票」の女優部門で1位を獲得したのである。

『めぐり逢せのお弁当箱』の主婦役のニムラト・カウ  
ルも艶やかでハリウッドでも注目されているが、相手役  
の寡（やもめ）早期退職男を演じるイルファーン・カー  
ンがまた素晴らしい。どこかで見た俳優：：そうです：：  
昨年アカデミー賞を獲得した虎と漂流した『ライフ・  
オブ・パイ』の大人になった主人公役である。決してい  
い男ではないが、洪さが光る素晴らしい俳優で存在感を  
感じさせる。

『バルフィー！人生に唄えば』は聾啞であるが、明るく  
生きる主人公バルフィーが2人の女性の不幸な人生を好転  
させていく物語を風光明媚なインド北東部のダーズリン  
を舞台にミュージカル仕立てで描いた感動的ドラマ。愛  
情を受けずに育った女性を2000年ミス・ワールド出  
身で、今や最も輝いているボリウッド女優のプリヤン  
カー・チョープラが演じている。

インド映画では、美味しそうに右手で食べる食事シー  
ンが必ず出てくるが、左手は「不浄」で右手は「浄」。

右手で必ず料理に直接触れて、調理された食材の触感を  
楽しむためなのだそう。トレイに盛られた美味しそ  
うな様々な料理を、実に器用にまた見事に食べつくすので  
ある。

今宵は焼き立てナムとカレーをアテに、インドビー  
ル キングフィッツシャーで行きますか・・

ロードショースパイスカレーの良夜かな

酔宵子

## ある自然科学者の手記 (30) 大橋望彦

## 『生きるを急ぐな』

最近、有線テレビの時代劇を専門に放映している番組に、嵌まり込んでしまった。然し、つい見過ごした番組等があると、特にシリーズもので、誠に残念に想うことがある。シリーズとはいえ、毎回、読みきり小説と同じように、一定時間内に完結して収まっているのだから、一回位見過ごしても、どうということはない。それに、必ず、再放送もされるので、またその番組を観れば良いのである。それでも気が済まずに、録画するという手法に手を出してしまった。是は、プログラムを観て、目指す番組があると、あらかじめ予約登録をしておき、ひとりでに、その時間帯の番組をチャンと録画してくれる。有難いことに、忘れることは無い。しかも、最近のイノベーションのお陰で、ブルー・レイ・ディスクという記憶媒体は、以前と比べて、とてつもなく録画容量が大きくなった。即ち、何十時間もの録画が一枚のディスクに

収まってしまふ。そのような事情で、観たい番組を次から次へと録画してしまい、しまいにはマニヤックとなって、全巻揃えないと気が済まなくなってしまった。周囲の人たちに笑われているのだが、何でそんなに録画するのか。録画したものを見直すことなどあるのか。一生かかっても、全部見直すことも出来ないでしょうに。等々、色々御意見を戴くことも多い。確かに、そうなのだが、それに反論すら出来ないのだが。それでも止める気にはなれない。『何か好いことが見付かった?』と言う質問を何方かがした。はたと思った。何か好いこととはどんなことであろうか。もし、見付けた場合、どうすればいいのか。……否、そんなことを期待してテレビ番組を観る人なんかいないな。でも、本当に好いことが番組から得られるのか。時代劇を見るのは、単なるリラククス程度に考えていたのだが、何か教わることでもあるのか。一寸、真剣になつて考えても見た。時代劇には、一つの鉄則のようなものがある。それは『勸善懲悪』である。どんなストーリーでも、是があれば、先ず安心して観ていられる。即ち、リラククスの根源がここにある。だから、登場人物には主役が善人で、脇役に必ず悪人が出て



くる。そして、主役が、悪人をやつつけてしまい、チョン。そうなる筋書きであることが判っていても、痛快なのである。それに、もう一つは『人情』である。ストーリーの中でホロリとしたり、コイツツーと思ったり、人の感情を刺激することで、先の『勸善懲悪』にアクセントを付けることが出来ている。

是は要因の一つではないが、時代劇を見てみると、良く昔の「ことわざ」とか「言い回し方」などが出てくる。例えば、「悔いの無い人生」などとよく出てくるが、そうかと思うと、「多情多恨」などという。どちらかと言うと自分は後者に近いのかな、とも思ったりする。こんな考えの切っ掛けを作るのも時代劇には多い。是は時代劇とは限らないのかもしれないが、『そんなに死を急ぐな』と言ったりする。身を捨てて何かに尽くす精神だが、近頃はそのような正義感の強い精神の持ち主が少なくなっているように想われる。あれば新聞に載る。ところが、最近の時代劇を観ていたらば、『余り、生きるを急がぬように…』と、言っているのを聞いた。途端にはその意味することが判らなかつた。余り聴きなれない言葉に感じた。どうも、その言葉が頭から離れなくなつて

しまった。『生きるを急ぐ』とは、何を意味するのであろうか。以前、老人研究所で、『老化の機構』を研究している頃でも余り聞いたことは無かつた。是は、考えても面白いと思ひ出した。急ぐことは、時間を短縮することだと簡単に考えれば、生命現象を短縮するな、と言う意味で、『早死にするな』と言う意味に取れる。そうかと思えば、また、現在生きていることを急いで過ごすな、位のことのようにも思える。そうだとすると、現在生きていることを甘受しろ、と言っているようにも聞こえてくる。考えている内に、何れにしろ、『死を急ぐな』と『生きるを急ぐな』とは、異句同義の言葉のようにも思えてきた。全く正反対の言葉を使って、同じ事を言っているのだろうか。日本語の難しいと言うか、微妙に巧みな言葉の使い方と言うのか、独りで感心してしまった。でも、是は自己流の勝手な解釈をして悦に言っているのと同じなので、全く間違つた解釈をしているのかもしれない。いやはや、誕生日なのに歳は取りたくないものである。『生きるのを急がない』ようにしようか。

以上

## 絹の話 (48)

「アトリエトレビ」今泉雅勝

### 絹と百貨店

#### 【百貨店の盛衰】

今日の老舗の百貨店はその昔、呉服屋から発展した店が多くあります。戦後復興が一段落して、高度経済成長に入る昭和40年代、呉服売場が百貨店の看板で、京都を中心に日本各地の伝統染織物、著名な作家物を集めて覇を競っていました。その売場には産地回りをよくこなし、染織の職人などとも交流を深めた着物の神様の様な老練な社員さんがいて、お客様に丁寧な故事来歴、付加価値を立て板に水の如く語ってくれていました。この時代百貨店のサービスとは豊富な情報と知的好奇心を満たしてくれるおもてなしでした。

四季折々反物を持つて顧客の家をまわってもしました。顧客の方も然るべき家の娘さんが嫁ぐ時、一竿も二竿も呉服で満たして持たせたものでした。呉服は持参金の様な意味も有り、育ての親の見栄も有りましたが、母と娘の愛情の絆の様な役割も果たしていました。品定めをしている時は、言い知れぬ幸せ感に満ちていた事でしょう。結婚式ばかりでなく、改まった場所には着物姿が女性の

主流で、洋装での出席は少しはばかられてもいました。

絹は日本の長い歴史の中で、庶民が作り、着るのは貴族、武家で庶民は儉約令や貧しさで表立って着用出来ず、昭和20年の終戦に到るまで「欲しがりません勝つまでは」と云う事で「繭を作れど絹知らず」の状態がずっと続いて来ました。ところが身分的、制度的に何の制約もなくなったこの時代、人々の生活が豊かになり「あこがれの絹」を手に入れようと日本中が狂奔したのです。その時は国家予算に比較されるほど売れに売れたのです。

日本では、これが最初にして最後の庶民と絹の出会いになりました。いつしか時代は化学繊維全盛の洋装主流になって、絹バブルを支えた方々ももう既に還暦を過ぎ、袖を通さない物や、仕立てていない物をどうしたらよいか悩んでいます。世界の布コレクターは、日本の箆笥を宝の山狙っています。これだけお世話になった絹に、百貨店は何の解決策も示していません。

今日の百貨店はスペース貸です。ブランド物は言うに及ばず各種雑貨に至までその物を出品した会社からの派遣社員か依頼を受けたマネキン会社の派遣店員で、販売現場に社員がいる事は殆ど有りません。知識経験が豊富な年配派遣店員といえども販売現場に立つ事を断られたりします。

売場は無味乾燥化が急速に進んでいます。経験浅い派

遣店員では今日のデパートを支えている高齢化した顧客の知的欲求を満す事は出来ようありません。知的サービスは管理数字の上にあがって来ないので本当のサービスとは何かを忘れてしまっています。

### 【呉服】

何処の百貨店も往時の華やかさはないものの呉服売場は残っています。和服売場とはあまり言いません。呉服とは今日では和装織物の総称を指していますが、古代中国の呉の国から伝えられた呉織（くれはとり）、即ち、古代から作って来た麻などの太物に対して薄物（綾織り等の高度な絹織物）を特定した舶来の高級ブランド品だったのです。漢織（あやはとり）とよばれる綾織と共に伝わって来ましたが、漢織は一般用語にはなりませんでした。当時の日本人々の目にはその綾織があまりに美しく見えたので、「あやしい」などと云う言葉が産まれたのは面白いではないでしょうか。呉服売場とは怪しいほどの高級織物売場と云うわけです。

### 【衣冠束帯と呉服】

呉服のデザインの特徴は合わせ衿で、ブータンから東北アジア、極東全域に見られます。ヨーロッパの衿や袖を詰める洋服とは全く異なった物です。平安の昔から貴

族の女性は正式な時も十二単重の様な重ね衿の呉服でしたが、殿上人の正装は貫頭衣を元とするもので、今日でも宮中の儀式や、神主の衣装などに連綿として用いられています。男子の世界では呉服は私服なのででしょうか。

### 【絹で活性化】

絹を高級品、美しく着ると云う観点から脱して発想の転換を図れば、新たな未来が開けて来ると思われれます。絹の機能性を生かした商品作りをするべきでしょう。抗菌性や保温保湿性を生かした健康、防災衣料用品、体力消耗抑制のスポーツやウオーキング下着など。メタボ、高血圧抑制などの成人病予防に役立つ食品を作ったり、医療用ガーゼから軟骨作りに至まで様々な物を作って、宇宙飛行士の為ばかりでなく、一般市場に広める努力をするべきでしょう。大腸菌で蜘蛛の糸（絹）を作り始めた会社は設備投資を重ねています。今日の百貨店にこの様な新商品を揃えた「シルクで健康」フロアーを出現させたら千客万来とならないでしょう。

そこには然るべきサービスマンが配置されてはじめて顧客の心を捉えるのです。森からの贈り物を求めたお客様方にはポイントを差し上げましょう。

## 物理学者と詩歌の世界 (58)

一石

### アラン・グース

アラン・ハーヴェイ・グース (Alan Harvey Guth, 1947-) は米国の理論物理学者・宇宙物理学者。マサチューセッツ工科大学 (MIT) の物理学教授。宇宙のインフレーション理論を最初に提案したことで知られる。

ニュージャージー州ニューブランズウィック生まれ。MITの物理学科を卒業 (1968)、同大学で博士号を取得後、プリンストン大学 (1971-1974)、コロンビア大学 (1974-1977)、コーネル大学 (1977-1979)、スタンフォード線形加速器センター (SLAC) で研究し (1979-1980)、1980年MITに戻った。コーネル大学時代に着想を得て、1981年インフレーション理論を発表した (参考資料1)。

現代の宇宙論において、物理学におけるアインシュタインの相対性理論に匹敵する衝撃を世に与えたのがこのインフレーション理論である。宇宙は巨大な爆発ビッグバンによって始まったと考えられている (注1)。このビッグバン理論には、いくつかの根本的な問が投げかけられていた。すなわち、「ビッグバンがなぜ起こったのか」

、「なぜ宇宙は広範囲にわたって均質なのか」、「なぜ宇宙は1点に収束したり過剰な膨張で拡散したりせず、安定した膨張を続けるのか」、「なぜ物質は存在するのか」である。「インフレーション理論」はこれらの「なぜ」に科学的な根拠をもって回答を与えた (注2)。それは素粒子論に立脚して、「宇宙が急速に膨張したのは最初の真空にもエネルギーがあったから」というものである (参考資料2)。

急膨張の際に発生し、今も残る「重力波」を観測すれば、インフレーションを直接証明できる。重力波とは、重力による時空の振動が光速で伝わる現象。原始重力波はインフレーションで発生した特に大きな重力波。2014年3月18日、米国のチームは南極に設置したBICEP2望遠鏡で、宇宙誕生時に放たれた光の名残りのマイクロ波「宇宙背景放射」を観測・分析し、間接的に原始重力波の存在を確認したと発表した。検証を目的に同様な観測実験が計画されている。

グースは「インフレーション理論」をもって、一躍宇宙論のフロンティアに登場した (注3)。以来、インフレーション理論の発展の牽引車の存在として、また宇宙論研究の主役として活躍してきた。自らの理論を一般向けに明快に解説した著書に『なぜビッグバンは起こったか…インフレーション理論が解明した宇宙の起源』がある

(参考資料3)。受賞歴には次のものがある。エディントン・メダル(1996)、ペンジャミン・フランクリン・メダル(2001)、ディラック賞(2002)、カブリ天体物理学賞(2014)「A・D・リンデ(ロシア)、A・A・スタロピンスキー(ロシア)と共同受賞」。

注1…われわれの宇宙は138億年前に、火の玉のような状態から急激に膨張したというビッグバンによって、誕生したと考えられている。「初期の宇宙は高密度かつ超高温だった」とするこの説は、G・ガモフによって提唱され(1947)、後にビッグバン理論と呼ばれるようになった。60年代に入ってから、その根拠となる宇宙背景放射が観測されて定説となった。

注2…インフレーション理論とは、宇宙創生の10のマイナス36乗秒後から10のマイナス34乗秒後までの間に、エネルギーの高い高温の真空の状態から低温の真空に相転移し、保持されていた真空のエネルギーが熱(転移熱)となって火の玉となり、ビッグバンを引き起こしたというものである。我々が通常理解する真空とは、エネルギーや質量が存在しない状態である。しかし、実際には真空中では物質と反物質が生まれてはぶつかって消えていく

ことを繰り返し、エネルギーが変化することで「真空が揺らぐ」現象が起こる(「真空の相転移」)。インフレーション理論はこの「真空の相転移」論に立脚するのである(参考資料2)。

注3…宇宙のインフレーション理論の最初の提唱者は誰か? グースと同様の「指数関数的宇宙膨張モデル」を日本の佐藤勝彦(当時ニールス・ボーア研究所)が発表している(1981年)。グースはインフレーションモデルを1980年1月にスタンフォード大学のセミナーで発表している。また、ロシアのA・A・スタロピンスキーも1979年に同様のモデルについてのアイデアを示し、1980年に論文を発表している。ロシア語で発表されたこの論文を当初知る人は少なかった。その後、ヨーロッパの専門誌に英文で発表された。「インフレーション」という言葉を最初に用いたのはグースである。

### 参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia: Alan Guth
- 2) Wikipedia, the free encyclopedia: Inflation(cosmology)
- 3) アラン・グース『なぜビッグバンは起こったか:インフレーション理論が解明した宇宙の起源』(早川書房)

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十八 土屋文明<sup>3</sup>

さん俵しきていこひの君が森も舟より見ればたちま  
ちにすぐ

大川におちてあつまる支流見ゆ其の水の鮎も君は食  
ひたり

夕かげる聴禽書屋見下して今宵の鮎を今食はむとす  
庭へだてかけれる聴禽書屋ありすでに障子を閉めて  
静まる 昭和二十三年『自流泉』

前号に挙げた「大石田にて」の歌の続きである。大石田での作品を収めた『白き山』は茂吉の生前昭和二十四年に刊行されたが、この歌集の口絵には藁靴を履いた茂吉が「さん俵」を敷いてまだ護岸工事のなされていない最上川の河原にすわっている写真が掲載されている。さん俵は米俵の上下両端に当てる丸いふたであるが、茂吉はこれを散歩の時に持ち歩いている。

一首目は茂吉が座っていた川原を舟から見ているとその背後の森もすぐに過ぎてしまうというのである。一、三首目は、茂吉が「われひとりおし戴きて最上川の鮎を

こそ食はめ病癒ゆがに」（『白き山』）と詠んだ鮎を、茂吉を思いながら食べたと詠む。四首目は昼の間は開けられていた障子が夕方には閉められいると聴禽書屋を詠んでいる。

死後のことなど語り合ひたる記憶なく漠々として相  
さかりゆく

慰めむ味噌汁を吾が煮たりしも口がかわくと嘆きつ  
づけき 昭和二十八年『青南集』

題詞に「追悼斎藤茂吉」とある。茂吉が没したのは昭和二十八年二月二十五日、葬儀は三月二日であった。近藤芳美は、「築地本願寺で行なわれた告別式で弔辞を読みながら、六十三歳の文明は声をあげて嗚咽していた」（『土屋文明の秀歌』）と書いている。一首目の下句に文明の偽らざる思いが表れている。

あひとともに老の涙もふるひにき寄る潮沫の人の子の  
ゆゑ 同右

具体的な出来事にこだわる必要はないが、上句はアララギ運営に関わる嘆きをいうのかもしれない。しかし、『赤光』の明治四十二年にある「潮沫のはかなくあらばもろ共にいづべの方にほろびてゆかむ」との間に何



か関係がありはしないかとも思う。この歌はたぶん「をさな妻」との生活への思いを詠んだものだろうが、明治四十二年という製作年を考えると「アララギ」草創期に互いの覚悟のようなものを確かめ合ったことでもあったのではないかという気がしないでもない。

ただまねび従ひて来し四十年一つほのほを目守るごとく

近づけぬ近づき難きありかたも或る日思へばしをしをとして 同右

十九歳で茂吉と会って以来、ただ学ぶ思いで茂吉に従ったその心の状態を「一つほのほを目守るごとく」と表したとき文明に一切の雑念はなかったと思われる。二首目の結句「しほしほとして」にも文明の純な心が表れている。文明は最初の歌集『ふゆくさ』の「巻末雑記」に「斎藤氏は自分の最も影響された所多い人であり、又最も厄介をかけた人である。」と早くから書いており、生涯茂吉を慕い、アララギを中にして共に生きたといつていい関係を持っていたのである。

石軽く雨の流るる山道に幾たびわれの従ひにけむ

此の山の温泉よろこぶ君がへに左千夫歌集も編みにしものを 昭和二十九年『青南集』

題詞に「そひの榛原」とあり、群馬県伊香保での思い出を詠んだものであることがわかる。一首目の「われの従」ったのが茂吉であることは二首目によってわかる。この山で『左千夫歌集』を編んだというから、これは昭和三年のことであった。

いつの時も早く目覚まし或朝は鳥を聞けよと呼び給ひにき

土の上にすぎし擬宝珠集めつつ三人なりしを今日一人ある

若葉さすそひの榛原ねもころにありけむものを来りて告げず 同右

先の「そひの榛原」の一首目に「幾たび」とあるから、この一連は左千夫歌集編集の時だけを詠んだものではない。二首目に擬宝珠を三人で摘んだとあるが、もう一人が誰のことかはわからない。三首目は『万葉集』巻十四・三四一〇「伊香保ろの傍の榛原ねもころに奥をなかねそまさかき善かば」（東歌）を踏まえている。茂吉も「白雲のみだれしづまるありさまをそひの榛原に居りてこそ見ゆれ」「そひの榛原見おろしをればこころよし大石見ゆところどころに」（昭和八年『白桃』）と詠んでいる。

## 楽しい時間 24

山本紀久雄

2014年9月30日

家内が8月20日に永眠しました。今年の3月、手術後に外科医師二人と看護婦から「残念ですが余命・・・」といわれてから5か月、あつという間でした。

その後、家内との楽しい思い出とともに、この世からいなくなつたという現実にご対応すればよいのか。正直、迷いながら暮らしてきました。

家内は毎日ブログを書き、通算15万超のアクセス。その最後のご挨拶を娘がブログに掲載したので、それを紹介させていただきます。

「2014年8月30日(土) 皆様へ」

今まで「みっちゃん」こと、山本美知子による『Happyな心で』ブログをお読みいただいております皆様、今日のみっちゃんの家族からブログを掲載させていただきます。

みっちゃんのブログは、2014年2月22日(土)に『24日から、検査入院のためブログは、お休みします』というメッセージ以来、掲載をしておりますでした。

その後、皆様からは色々「心配をいただいておりますが、検査の結果はすい臓がんと診断で、手術を受け一旦退院後自宅で療養しておりますが、7月8日(火)に再入院、

8月20日(水)未明に永眠いたしました。みっちゃんは、元々の頑健さに加えてヨガ活動を通じて健康

的な生活を送っておいりましたので、突然の癌細胞が体に存在するとの診断結果が信じられず、当初は心の葛藤がありました。もう一度元気な姿で皆様にブログをお届けしたいと頑張っていました。しかし、時間の経過とともに徐々に癌細胞と共存する生き方を受け入れ、治療を続けながら心の落ち着きを取り戻し、遺された私たち家族にエンディングノートを書くことで今後の方向を表してくれました。



みっちゃんは活動的で明るい人間でした。そして、最後はいつも感謝の気持ちを持ち、病院のスタッフの方々、周りの人々や家族に「ありがとう」と言っていました。

最期は痛みもなく、穏やかに安らかに、眠るように次の世界へ旅立ちました。

また、みっちゃんは花が大好きだったので、生前希望していた沢山の花に囲まれた祭壇で大好きだった方々にお見送りいただきましたので、今はとても喜んでお思います。

今まで『Happyな心で』をご愛読いただいた皆様、生前みっちゃんと仲良くしていただいた皆様、お世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。

初めて喪主となった通夜、葬儀・告別式、その後の諸手続き、毎日、いろいろなところを回って処理していると、本当に人が亡くなるということは、我々が生きているこの社会と切り離された、全く関係のない別の存在になるものだなあ



と、感じ入り、つくづくこの世とは生きている人間の世界であると痛感し悟りました。

この亡くなる体験と悟るまでの間、それは病院での治療期間ですが、これほど辛い苦しい毎日はありませんでした。日々の変化、それは死という所への道筋をたどることであり、そこへ到達してしまう怖さに、毎日、病院のベッドの傍らに肩を落とし座り続けました。

とうとう「奥さんより旦那さんの方が心配だ」と、医師が言うまでに落ち込みましたが、何とか持ちこたえ、通夜からの一連の行事と手続きを終えることが出来、正直、ホッとしています。それが、それを支えてくれたのは、すべて家内でした。

家内は自らの病状を正しく把握し、いつごろか死というもののを恐れなくなり、遺される家族への配慮、それがエンディングノートだったわけですが、その中に具体的に今後の行動事項を正確に書きこんでくれ、その示された内容に基づき過ごしてきたのが、この一か月だったからです。

一か月経過してみても、家内がいる前提でつくりあげた「今後の生き方」を、「家内がいらない状態での生き方に変更」する必要があるという当たり前のことに、改めて気づきました。その時、10年前に夫を亡くした方から、次のようなアドバイスを受けました。

「主人が死んですぐ後に、人に言われました。今から少なくとも一年は、新しいことを始めない方がいい。変になつていから、判断を間違え、というわけです。あのときやりたかったことがあったけれども、やれば大けがをしていたでしょう。今はそう思います」

この見解は当たっていると思います。自分では、沈着冷静に平常心を失わないように気をつけていても、この一か月、思い起こしてみれば、いくつもの心当たりがあります。

しかしながら、新しいことは始めなくても、これからの人生計画を創り直さなくてはいけないだろうと思います。人は、生きていくうえで、ある種の物語を創りださねばならない存在だと、今まで常に意識してきて、それを創りつつ家内と歩んできました。

その修正が必要だろうし、それは「新しいことではない」と思います。だから、一人で生きていくための新たな計画は必要です。ただし、今の気分では、すぐにはできないことも事実なのです。

しかし、まてよ。新しい生き方計画を創りだすことは創造だ。NHK連続朝ドラ「アンと花子」の常套句ではないが「想像の翼を広げる」作業だ。朝ドラは「想像」だったが、自分は「創造」だ。ということは、それは本来「楽しい」はずだ。このように考えてみれば、自分の好きなことを仕事にしてきた今までの生き方、それは家内がいなくなつても出来るはず。一人になったという条件変化が生じたに過ぎないわけです。

目の前に起きた家内のことは、人生で最も哀しいことだが、その事実も「ひとつの条件なのだ」と考えることが大事で、今は、その条件を活用していくことが仕事のはずだ。

そう思いなおすと、これからの人生計画創りは「楽しい時間」だと思えるようになった。

気持ちの切り替えは正直大変だと思いつつ、新たな「生き方物語」を創るつもりです。

# 旅の旅の旅

夏目勝弘

十月十三日、湯本の鎌倉屋に宿る。

○旅の旅又その旅の秋の風

客引きに袖を引かれるまま入った旅館が、むさ苦しい家で、前日来の病もまだ癒えていない、十月も中旬箱根の山中、身にしむ寒い。

○だまされてわるい宿とる寒さかな

十月十四日、快晴。箱根街道を登る。

○色鳥の声をそろへて渡るげな

○箱根路は一月早し初紅葉

旅の旅の思いつきで来た箱根、歩くのは無理、登山鉄道で往復することを思いつく。箱根登山鉄道は湯本より強羅まで、子規の歩いた道とは異なるが、感覚的には同じであると独り決めました。

講談社の子規全集十三巻の巻頭に、子規が箱根路の途中で写した写真がある。

菅笠に手拭で包の結び目に通し肩に掛けるようにした、包が一つの軽装、ワラジを結び直しているポーズ。

写真の裏書きには明治二十五年十月十四日、箱根山をこゆる時、我なりを見つけて鶴の鳴くらしきとある。

病み疲れた身では、休み休みの登り一坂のほれば岩に掛ける。駕籠かきのすすめも聞き流し、なお登りつづける。

○石原に瘦せて倒るゝ野菊かな

二子山の間近まで登り茶屋に腰を掛け見上げる千仞の谷間より木を背負い汗を滴らした樵夫も茶屋にて休む。

○樵夫二人だまって霧をあらはるる

○店先の柿の実つつく烏かな

○山姥の力餅売る薄かな

力餅に力を借り一里ほどを上り杉櫨の大木の間より、元箱根を目下に見る。

○紅葉する木立もなしに山深し

ようやく山頂の芦の湖に着く、湖面に映る富士に見入り

○鶴鶴や飛び失ふて残る不尽

箱根駅で昼食、湖の名物の赤腹という尺余りの魚を食べる。

○赤腹とあだ名や立ちて紅葉餅

○出つ入りつ薄の山と蘆の浜

見渡す限りの薄のなかを下り、箱根の関所を問ひたくも人影なし関所の跡もない。

○関守のまねくやそれと来て見れば尾花が末に風わたるなり

○への字への字がさなる山の薄哉

見渡す限りの薄の山を下り三島へ三島神社に詣で、相模屋に宿る。

十月十四日湯本を出発し箱根街道を登り茶屋で休み、元箱根を眼下に芦の湖、関所跡等を通り、見渡す限りのスキの山を下り三島に着く。

湯本から三島まで、地図上を計測してみた大凡二十四キロ、ただ通つたのみではないであろう。

名所名所では彼方こちらと見て歩いたと思う。そうすると二十五六キロにはなる。平地ではない山道、病身とはいえないで歩いた。

子規は三島より乗合馬車で修善寺そして軽井沢で一泊、十月十六日人力車で江ノ浦・根府川そして石橋山の麓を通り小田原に、そして国府津まで歩き大磯へ。旅の旅の終り。台風を気にしながら登山鉄道で手抜き旅を楽しむ。大木の乱立深い緑のなか、時々木間より見え隠れする街道に、子規の旅姿を思いに歩ませながら、のんびりと車窓を見ている、そこここにネムの淡紅の花が彩を添える。

## 「氷魚」のことから (166) 岡本八千代

平成十四年九月十九日は、子規の百十二回忌、癩祭だらいさいであった。恰も韓国の仁川インチョンアジア大会がはじまった日であった。——今は、各種目の選手たちの大活躍の真つ最中。

そして、静かに今日こそ「氷魚」の稿を書こうと、庭に出てみると、まっ白い一花が咲いているではないか。こんな処にこんな美しい五弁の花が？いつのまにか自生えして、自らを表現したのだった。まだ茎も細く葉もみどり淡く。……調べてみたら、木樨ムギらしい。

さて、子規先生なら如何思われるだろうか。そんな思いで、子規の少年時代を書いてみる。

やはり、子規の又また従兄弟いととに当たる三並良はじめ氏の書かれた「子規の少年時代」に基づいて書く。

子規たちの子供の頃は幼名（通称）が用られる習慣があつて、正岡常規が戸籍上であるのに、処之助とろのすけと呼ばれた。ところさんと呼ばれたようだが、喧嘩けんかなどすると「ところてん」と罵られたらしいので、四、五歳の頃は升のぼるに変えたといわれている。故に、近親者は「のぼさん」と呼んだらしい。

かくして、のぼさんとこうさん（良はじめのこと）は仲良く小学校も中学校も同級生だんだんた。

・今度は、景浦先生の許に夜学に通った。主に、数学と読書の復習であった。そして、この先生には三国史とか、

漢楚軍談など教えられた。時々先生は、自分がまだ読んでいないからと断られることあつたので二人は貸本屋で本を借りて読んだりもした。

・松山の銀座通りといわれる大街道に、寄席があつた。それに軍談（講談）があつて燕柳えんりゅうという男の人の眞田三代記を面白可笑しく述べたので二人は夢中になつていた。

・景浦先生の夜学へ行く晩に、二人は寄席の前を通つて、聞きに行つてしまつた。

・二人は一銭も小遣をもつていないのに、少し遅れてゆくと木戸へ五六厘あればゆけるので、とうとう近くにあつた子規の親類で金を借りて、寄席へ行つた。

・夜学から帰つたように、いつものように家の大戸を開けようとしても開かない。

・中から母の声がして「今夜はもう開けてやらん」と。そこへ子規がとんできて、彼も「家へ入れてもらえない」と。なぜ露見したのか。その晩、雨が降り出したので、二人の母親は、雨傘と下駄をもつて、迎えに行つたが、景浦先生に、「今夜は、二人とも来ない」といわれて、「それでは、燕柳を聴きに行った」と双方の母たちが相談して門をしめて入れなかつたのだつた。

そういうこともあつた彼らの少年時代……。学問をしてゆく途上には、こんなことも無かつたよりはあつたほうがいいかもと私……。

ことのはスケッチ (431) 今泉 由利

『ドナルド・キーン先生』

- 東京北区アンバサダー・北区名誉区民。日本国籍を取得された。アメリカ・ニューヨーク州ブルックリンのお生まれ。
- 一九四〇年、ニューヨークタイムスクエアの本屋で、アーサー・ウェーリ翻訳の『源氏物語』を見つければ、「私は読むのをやめることが出来なくて…」と、日本文学研究のきっかけとなられる。
- 一九四二年、米海運日本語学校に入学。日本語を習得され、太平洋戦線の日本語の解説、通訳を勤められる。終戦後、はじめて東京と日光を訪れる。
- ハーバード大学を経て、ケンブリッジ大学で日本語の講師を務められ、後、日本文学の講義をされた。
- 京都大学大学院に留学のかたわら「茂山千之丞」に狂言の指導を受けられた。
- 谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、永井道雄、司馬遼太郎：知り合われた。
- 一九五五年、「奥の細道」の旅をされた。
- 一九七六年、「日本文学史」の刊行開始。
- 二〇〇二年、「明治天皇」刊行。
- 数々の賞を受けられた後、二〇〇八年、文化勲章を受賞される。
- 二〇一二年、コロンビア大学を退官され、日本国籍を取得された。
- テレビの映像は、日本国籍を北区区役所で取得されるドナルド・キーン先生のご様子を映していた。
- 私のすぐ近くに住んでおられることを知り、「三河アララギ誌」をご覧いただきたく、お送りした。直ぐご自筆日本語のお返事を下さいました。「……ところどころしか拝見していませんが、分り易い内容の面白い歌が多いように思いました。これからゆつくり読むこと楽しみにしています」。私の宝、心の中心にして生きしてゆく。三河アララギを大切に守ってゆく勇気が湧いた。それからずつと厚かましくも月々の三河アララギを先生にお届けさせていただいてみる。
- ニューヨークに住んでいる娘の家が、タイムスクエアの近くにあり、ニューヨークに絵を描きにゆくときは、ここを拠点に、歩き回る。「このあたりで、先生が『源氏物語』に出会われた」ことを思いながら。そしてもう少し歩くと、先生が住んでおられた・リバーサイドドライブ・に行き着く。
- 四十年近い年月を外国暮らしをし、外国にいて日本を思う、外国から日本に帰り、あらためて日本を知る。日本人になられた先生から、日本をお教えいただく。この厚みある感覚がとても私に馴染む。
- 北区アンバサダーイベント「ドナルド・キーン日本、そして東京都北区、集りがありました。九十二歳になられる先生がご出席下さる。「五十年前から北区に住んでいます」と、日本語で話される。「北区がとても親切で、旧古河庭園の緑に心ひかれ、とても好きです。住みはじめた頃は、友達は一人も居ませんでした。今では大勢います」。やさしく、振り返られるように話されるのでした。
- 先生は北区の図書館にご著書を沢山寄付されました。いつでも、どんなことでも、図書館にゆけば適います。お教えただいております。

## 「歴代天皇御製歌」(三十)

貫名海屋資料館

『冷泉天皇』第六十三代・在位九六七年(十八歳)―九六九年(二十歳)

冷泉天皇。村上天皇の第二皇子。病弱のため、藤原実頼を関白に任じ藤原氏の政權独占の時代となる。光源氏を思はせる世にも美しい天皇であられた。二年間のみ在任、六十二歳のご生涯には、多くの和歌を残された。

### 「詞花和歌集」第九卷

世の中に経るかひもなき竹の子はわが経む年をたてまつるなり

花山院御製

年を重ねるかひもない子として父君が長生きされるよう自分の年を さしあげます。

御かへし

年へぬる竹の齢をかへしてもこのよをながくなさんとぞ思ふ

冷泉院御製

歳とつた自分の年齢を返してでも、お前の寿命を長くしたいものだ。

## 編集室だより【二〇一四年 九月】

○縁あり、田端中学のパソコン教室を利用した「OB達のパソコンスクール」に、部外者私も教えていただけることになる。

△にいられるように日々新しいことがあらわれ、戸惑い、見放されそうになり…そんなとき現われた救いの場。

○9月8日、午前3時、直径18メートルの小惑星が、地球に非常に近い距離を通過した。

○筑波の「KEK高エネルギー加速器機構」の一般公開にゆく。一応、放射線管理区域の放射量は十分に低く、被曝の恐れはないと。

マイナスの電気を帯びる。電子と反対の性質を持つ陽電子を加速器で光速ほどで衝突させ、BELLE測定器で、衝突によって起る現象を調べる。ことの次第を、素人私にも説明いただき、少しは分ったような気持ちになる。

そして、宇宙創成の物理に迫るため、もっと性能の良い国際ニアコライダーを計画中であること。益々興味はつる。

○北区アンバサダーイベント「ドナルド・キーン、日本そして東京都北区」。招待いただいた。九十二歳になられる先生自らおいで下さる。日本文学を世界に知らしめ、日本文学を研究する後進を育てられ、日本文学の発見、評価：

五十年前から・北区・に住まれ、とうとう日本北区に永住、日本国籍を取得された。近くに、ドナルド・キーン先生がおられる幸せを日々噛みしめている。

○等々力溪谷、九品仏吟行。

東京の普通の街の、小さな階段を10メートルほど下りると谷沢川が溪谷と流れる。この10メートルに、武蔵野台地の黒土層、立川ローム層、武蔵野ローム層、武蔵野礫層、渋谷粘土層、上部東京層の順に堆積し、それぞれの地層を好む木草が生え繁り、至る所から水は湧きだし、不動の瀧となる。

真言宗の等々力不動も、この辺りを守っておられる。階段をのぼり、街道を少し歩くと「九品仏浄真寺」。

極楽往生の九の階層、九体の阿弥陀如来が安置される三つの阿弥陀堂と彼岸の読経が聞こえる本堂。天然記念物に指定されている古木イチヨウ。巨樹カヤ。曼珠沙華はここに。さぎ草は花の季を終えていた。

○上野、国立科学博物館。「太古の哺乳類展」。日本の化石でたどる進化と絶滅。

アフリカ、ユーラシア、北アメリカ：すべて陸続きの大陸だった。そこから日本列島が出来てきた様子が動画で示され、興味深かった。恐竜たちが繁栄していた時代にも、確実に進化していた原始哺乳類。数百万年の間、大陸から渡ってきて、繁栄し、絶滅していった日本のゾウたち。アケボノゾウ、ミエゾウ、ナウマンゾウ：今に残る化石の展示に事実を、日本列島にゾウが繁栄していたことを知る。



## 和菓子街道 (97)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 伊勢街道(20)

へんばやを出ると、ほどなくして小俣宿だ。小俣の最盛期は、江戸時代よりもむしろ明治中頃。明治26年(1893)に参宮鉄道が開通し、参宮客が皆、小俣にある宮川駅で下車したためだ。しかしその4後に鉄道が宇治山田まで開通すると、小俣で下りる旅人はめっきり減ってしまった。

小さな小俣宿はすぐに終わってしまい、宮川に出た。江戸から来ても、大坂から来ても、伊勢に入るには必ず渡らなければならなかったのが宮川。渡し場(桜の渡し)跡には今は雁木と常夜灯が再現されてされており、少しだけ昔の雰囲気を楽しむことができる。

明治初年までこの宮川にあったのが御福餅だ。宮川に度会橋が架けられ、客の流れが変わってしまったため二見に移転したと聞く。創業は200年ほど。天岩屋戸に籠もった天照大御神が、天宇受賣命の舞



餡を指で押さえてつけた筋は、「二見ヶ浦に打ち寄せる波」を表している。

で外に出たことで再び世に光がさし、福が来たという神話に因む名だとか。

天照大御神の登場で伊勢が近いことを実感。宮川橋を渡ればよいよ伊勢だ。

#### ◆御福餅 本家

住所：三重県伊勢市二見町茶屋197-1

電話：0596-43-3500

## お知らせ

▽十二月号の原稿は、十一月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集三河便り

どことなく良い香りが漂ってくるのを感じ庭の金木犀を見ると、小さなオレンジ色の花がびっしり。金木犀の花が咲く頃になると海苔粗朶そだの準備を始めるということを古い三河アララギの会員が言っていたのを思い出します。

三河湾はかつて海苔の一大産地であり、長い間三河アララギ発行所の所在地であった御馬は、多くの家々が海苔の仕事に携わっていました。

そんな御馬の地で毎月歌会が行われ今は亡き先生方を囲み勉強した当時から懐かしく思い出されます。旧発行所の前を通るとき、世の中の移ろいを深く感じさせられます。

発行所も編集室も東京に移り新しい三河アララギの始まりです。(平松)

## ◆「絹の話」の今泉雅勝 豊橋展◆

『ワイルドシルクフェスタ』

場所 ほの国百貨店6階  
2014年11月6日～11月10日

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知されたい。退会の際も同様たちに連絡されたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年十月二十五日印刷 第六十一巻 第十一号  
平成二十六年十一月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野可南子・夏目勝弘  
平松 裕子・山口千恵子

### 発行人 発行所

今泉由利  
三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒一四一〇〇三二  
東京都北区王子本町一の二六の六A  
TEL (〇三)五九二四一・二〇六五  
振替口座 〇〇八三〇一六・五六三九  
E-mail yur188@cronos.ocn.ne.jp  
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>  
印刷所 株式会社 桜 創 美